

## 「ノルウェーでムーアに対して口述されたノート」・ 読解 (1)

川 崎 誠

「ノルウェーでムーアに対して口述されたノート Notes dictated to G.E. Moore in Norway」(1914年4月) — 以下「ムーア」と略 — を「付録2」に含む『Notebooks 1914-1916』は、『論理哲学論考』 — 以下『論考』と略 — を理解する上での参考文献となりうる。とりわけ「ムーア」は論理的な進展において『論考』に直接すると思われ、実際「命題の一般的形式 the general form of a proposition」等『論考』において繰り返し論じられる事柄が数多く登場する。

ただし参考文献だからその理解はより容易であるかと言えばそうでなく、『Notebooks 1914-1916』には『論考』以上に難解な箇所も少なくない。そこで以下では、ヘーゲル『大論理学』とマルクス『資本論』を参照しながら「ムーア」を読む、という方法を採用。「ムーア」はその論理の展開において『大論理学』と一致するからであり、また『資本論』に説かれる経済学的事実はそうした論理展開を理解する上での具体的イメージを提供するからである。かかる方法に対しては、偶然にすぎない一致を過度に重視する、そもそも三者を対比すること自体が恣意的だ、といった論難がただちに予想される。だが実は、そうした論難そのものが、ウィトゲンシュタイン理解の浅薄を暴露している。人知を超えるかに見える一致から出発し(『哲学探究』234節)、論理の進展に適った進み行きを経て真理に達する(『論考』3-33)、ウィトゲンシュタインの採った学の道筋はこれだからである。この点を理解できないのは、テキストの読解に難があるだけの話である。ただしかかる方法を採用することは、ウィトゲンシュタインが『大論理学』や『資本論』を実際に「読んだ」と主張することではない。私の関心はそうした伝記的事実には向かない。

また仮に何らか「読んだ」という証拠を挙げたとしても、そのような「発見」ないし「証明」はウィトゲンシュタインの採る方法ではない。これもまたウィトゲンシュタインを読めば分かることである（『哲学探究』185節）。

-----

はじめに「ムーア」全体の見通しを立てるべく、最初のひとまとまりをなす（と私が読解する）叙述を原文で通読してみよう。

108a LOGICAL so-called propositions *shew* [the] logical properties of language and therefore of [the] Universe, but *say* nothing. <sup>(1)</sup>

108b This means that by merely looking at them you can *see* these properties ; whereas, in a proposition proper, you cannot see what is true by looking at it.

108c It is impossible to *say* what these properties are, because in order to do so, you would need a language, which hadn't got the properties in question, and it is impossible that this should be a *proper* language. Impossible to construct [an] illogical language.

108d In order that you should have a language which can express or *say* everything that *can* be said, this language must have certain properties ; and when this is the case, *that* it has them can no longer be said in that language or *any* language.

108e An illogical language would be one in which, e.g., you could put an *event* into a hole.

108f Thus a language which *can* express everything *mirrors* certain properties of the world by these properties which it must have ; and logical

so-called propositions shew *in a systematic way* those properties.

108g How, usually, logical propositions do shew these properties is this : We give a certain description of a kind of symbol ; we find that other symbols, combined in certain ways, yield a symbol of this description ; and *that* they do shews something about these symbols.

108h As a rule the description given in ordinary Logic is the description of a tautology ; but *others* might shew equally well, e.g., a contradiction.

冒頭に付した記号「108a」等は『Notebooks 1914-1916』第二版の頁数とパラグラフ番号であり、つまり「108a」は「p.108の第一パラグラフ」を表わす——ここで「ムーア」の全体についてのことを述べておきたい。すべてのパラグラフが独立しているわけではなく、幾つかがまとまりとして読まれるべき場合もある。ただしどのパラグラフがそれに該当するか、テキストに明示されてはいないから、判断は読手の理解次第である。例えば Blackwell 版ではパラグラフ間に余白を設けることが多いが、その余白幅は一様ではない。また独語訳の Suhrkamp 版には余白そのものがない。さらに大修館全集版の邦訳にも訳者による独自の区切りが散見される。本稿でも数パラグラフを一つにまとめる場合があるが、すべて私の読解に基づいてのことである——。

さて 108a から 108h を通読して ‘properties’ の頻出は容易に気付くところであり、また ‘a proposition proper’ や ‘a proper language’ も見出される。‘property’ と ‘proper’ の派生関係を考慮して本稿では ‘property’ に「固有性」を当て、‘a proposition proper’ および ‘a proper language’ はそれぞれ「固有の命題」「固有の言語」と訳す——大修館全集版(奥雅博訳)では ‘property’ を「性質」、‘a proposition proper’ を「本来の命題」、‘a proper language’ を「まともな言語」と訳しており、三者の関連が掴みづらい——。するとまず注意されるのは ‘a proper language’ (固有の言語) であり、これは言語学に謂う「特定共時態 idiosynchronie」であるだろう——idio-「固

有の、特殊な」――。

次には 108c と 108e との関係が注意される。

108c 何がこの論理的な諸々の固有性であるかを口に出す [口に出して言う] ことは不可能である、というのは、そうするためには件の諸々の固有性をもたない言語が必要であり、そしてこの言語が固有の言語であることは不可能だから。非論理的な言語を構成することの不可能。

108e 非論理的な言語とは、例えば、そこでは出来事を穴の中に押し込むことができるような言語であろう。

108c の説くところから「非論理的な言語」が「固有の言語」でないことは明らかであり、「非論理的な言語を構成することの不可能」についても説かれている。ところが 108e ではその「非論理的な言語」への言及が再びなされる。それを「構成することの不可能」にもかかわらず、なぜ再度の言及であるのか。前言とは裏腹に「非論理的な言語」が構成されうると言うのだろうか。それにしても「出来事を穴の中に押し込む」とは如何なることか。

その理由を示唆するのが 108d である。

108d 口に出すことのできるすべてのものを表現しあるいは口に出す [口に出して言う] ことができる言語をもつためには、この言語は或る一定の諸々の固有性をもたなければならない；そしてその場合には、この言語が当の諸々の固有性をもつことは、この言語においてもはや口に出す [口に出して言う] ことができない、あるいはどんな言語においても。

ここには「口に出すことのできるすべてのことを表現しあるいは口に出すことができる言語」とあり、するとこの言語は「固有の言語」（特定共時態）ではありえない。というのは、「固有の言語」には次のような事情があるからだ。或る脚本家書いている。

1 月のある夜、テレビでニュースを見ていると、スマートフォンについて街頭インタビューをしていた。すると、30 代らしき男の人が、次のように答えた。

「スマートフォンは、レストランとか簡単に調べて行けられる」

どうです、この日本語。「行けられる」ですよ、「行けられる」。

また、昨年の夏のこと。大きな試合に出場が決まったプロスポーツ選手が、テレビ番組で次のように話していた。

「自分が出れるとは思わなかった」

どうです、この日本語。「出れる」ですよ、「出れる」。

これらは「ら抜き」の言葉を認めた弊害である。彼らは「～することができる」という「可能」のニュアンスを伝えたかっただと思う。「ら抜き」の場合、「出れる」で「可能」は示せし、「行く」は「ら抜き」とは関係なく「行ける」で示せる。しかし、日常的に「ら抜き」で話している人にとって、そこに「can」のニュアンスはこもっていない気がしたのではないか。そして咄嗟に出たのが「行けられる」であり「出れる」だった。

だが、彼らを一方的に責めるわけにはいかない。責められるべきは「ら抜き」を許したことだ。常套思考の「言葉は生きもの。変化は当然」を猛省する必要がある。

先ごろある女性国会議員のインタビューをテレビで見たが、みごとなまでに「ら抜き」で語る。もしかしたら「週末は地元に戻れた」とでも言うかと思っただが、さすがにそれはなかった。興味深かったのは、「ら抜き」で語る彼女の言葉に、画面表示ではすべて「ら」が加えられていたことだ。テレビ局の良心を見た気がした。

(内館牧子「この途方もない言葉」日本経済新聞 2011 年 2 月 19 日)

「ら抜き」を難ずる脚本家は特定共時態・現代日本語の話者である。その「固有の言語」は「行けられる」「出れる」を「途方もない言葉」と呼んで斥ける。当の言語においては「行けられる」等を「口に出す say」ことはできないからである — ここで邦訳について触れておきたい。大修館全集版では‘say’に「語る」を当てており、そこで 108d の ‘In order that you should

have a language which can express or *say* everything that *can* be said, this language must have certain properties.’ は「語ることが可能な全てのことを表現しうるもしくは語りうる言語が存在するとすれば、この言語は或る性質を持たねばならない」と訳される。そして「語る」を「口に出す」と比べれば、前者には何らかの中身のあることが語られるというニュアンスがより強く出る。しかしここでは中身の有無にかかわらず、「固有の言語」（特定共時態）の受容しない「言葉」が口に出される、このことを説いているだけである。中身のあることとりわけ深遠なことを語りうる・あるいは語りえない、それが問題なのではない。‘say’を「語る」と訳すのはミスリーディングである<sup>(2)</sup> —。

つまり 108c から 108e にかけては 108d において転換がなされ、108e では「固有の言語」（特定共時態）をいわば超える言語が採り上げられている。ではその「超える言語」とはどのような言語なのか。「行けられる」の交通する言語はその例だが、さらに幾つかの言語事実を参照しよう。ソシュール『一般言語学講義』 — 以下『講義』と略 — から事例を借りる。なお同書初版の刊行は「ムーア」が口述された二年後 1916 年であるから、口述時のウィトゲンシュタインがソシュール説に通じていたとは思われない。『講義』のもとになるジュネーヴ大学での一連の講義（1907 年～1911 年）を、例えば聴講生のノートを通して知った可能性もおそらくない。だから『講義』に挙げられる言語事実と類似のものが「ムーア」に見出されるとしても、それは「偶然の一致」と解した方がよかろう。

ともあれはじめは「共時論的同一性 *une identité synchronique*」に関する『講義』の叙述である。

ある講演の席で、たびたび *Messieurs!* という語を連発するのを聞いたばあい、そのつどそれは同じ表現であるとの感じをもちはずするものの、言い場所によって口調のちがいや抑揚のために、はなはだしい音的差異が現われる — そののはなはだしさは、ほかのばあいならばべつの語を区別させるほどである（参照、*pomme* と *paume*、*goutte* と *je goûte*、*fuir* と *fouir*、etc.）（p.151）

別語を思わせるほどの「はなはだしい音的差異」であるにもかかわらず、特定共時態フランス語の話者は *Messieurs!* は *Messieurs!* である (同語反復) ことを疑わない。

続いて「通時論的同一性 *une identité diachronique*」に関する次の叙述。

[ラテン語の] *calidum* と [フランス語の] *chaud* のように大いにことなる二語の通時論的同一性とは、たんに、言のなかで一連の共時論的同一性をつぎつぎと通ってきながら、それらをむすぶ紐帯があいつぐ音韻変容によっていちども中断されなかったことを、意味するにすぎない。

*L'identité diachronique de deux mots aussi différents que calidum et chaud signifie simplement que l'on a passé de l'un à l'autre à travers une série d'identités synchroniques dans la parole, sans que jamais le lien qui les unit ait été rompu par les transformations phonétiques successives.…… (中略) ……ある演説のなかで引きつづきなんども発せられた *Messieurs!* がいかにそれじたいと同一であるかを知ることとは、……*

*(中略) ……なにゆえに *chaud* が *calidum* と同一であるかを知ることにおとらず興味があると、いうことができたのは、このゆえである。第二問はじじつ第一問の延長であり、複合であるにすぎない。(p.253)*

「(*calidum*→*chaud* の) 第二問が (*Messieurs!* の) 第一問の延長であり、複合である」のだから、第一問は第二問のいわば出発点であり前提をなしている。そしてこの「通時論的同一性」の「一連」*calidum*→*calidu*→*caldu*→*cald*→*calt*→*tšalt*→*tšaut*→*šaut*→*šot*→*šo* (*chaud*) をきめ細かに辿るならば、その途次に上に引いた「途方もない言葉」の事例も現われよう。*calidum*→*chaud* は音韻変化であり「行けられる」「出れる」は類推による産物だが、両者 (音韻変化と類推) とも言語進化の要因であることに変わりはない<sup>(3)</sup>。つまり「固有の言語」(特定共時態) を「超える言語」とは、共時論的事実が自ら通時論的事実に転化する、そのような言語である — なお上の引用中原語を付した一文は、通時論的ないわば「交換」(例えば *calidum* と *calidu* との) が「中断されない」と説き、これは後に触れる「運動の連続性 *Continuität*

der Bewegung」との関連において注目される場所である ―。

さらに次の事情もある。

絶対の不動というものは存在しない；言語のあらゆる部分が変化にさらされているのだ；いずれの時期にも多かれ少なかれいちじるしい進化がある。これには遅速・強弱があっても、原則そのものは効を失わない；言語のうしおはとうとうと流れてやむことがない；その緩急は第二義のことである。(p.197)

すると言語交通の実際において「途方もない言葉」の出現はむしろ常態であるが、そのような言語は「非論理的な言語」であろう。逆に言えば、特定共時態（固有な言語）がそれであるところの「論理的な言語」とは、実はひとが普段手にしている言語ではない。『講義』は次のように説く。

共時論的法則とは、たんにいまある秩序の表現であって、一つの事態を認証するものである；それは、果樹園の樹が五点形におかれていることを認証するものと、おなじ性質のものである。そしてそれが定義する秩序は、一時的のものである。(p.129)

つまり共時態とは「いまある秩序 *un ordre existant*」にすぎず、そもそもが「一時的（不安定）*précaire*」のものである。そうであれば「ムーア」が「固有の言語」ととどまることなく、それを「超える言語」を考察するのはむしろ当然なのである。

だがすると問題が生ずる。特定共時態が不安定であるならば、ひとは確実な知識を手にしえないのではないか、これである。「ムーア」から『論考』にかけてのウィトゲンシュタインは、このような問題意識を抱えていたと私は見ている。

そして言語が「途方もない言葉」に直面しながらも確実な知識に至るその道筋、この点を考える上でもやはり『講義』の叙述は貴重な示唆を与える。



言語のなかに入るものは、一として言のなかで試みられなかったものはない;そして進化現象はすべてその根源を個人の区域にもつ。この原理は、……(中略)……かくべつ類推的改新に適用される。*honor*が*honōs*に取って替わりうる競争者となる前には、さいしょの話手がこれをその場で作り、他人がこれを模倣し、反復し、ついにこれを慣用せざるをえなくすることが、必要であった。／すべての類推的改新が、そのような幸運にありつくわけでは、なかなかない。おそらく言語の採り上げまいあすの日しらぬ結合には、ふんだんに出あう。(p.235)

「さいしょの話手」の言 *parole* における「試み *essai*」と聞手たる「他人」による「模倣 *imitation*」。「行けられる」や「出られる」はこの段階であろうが、脚本家が「途方もない言葉」と呼ぶように、これらはまだ「言語 *langue* の採り上げまいあすの日しらぬ結合」である。これに対して「着れる」「食べれる」等の「ら抜き」であれば「反復 *répétition*」の段階であると言え、そこでは新形と「着られる」「食べられる」との「共存 *coexistence*」が見られる。さらに

しかしながら言語は唯一の観念にたいして二個の能記を維持することをきらうので、たいていのばあい、規則性のおとる原始形のほうが廃用に帰し、消滅する。(p.228)

という事情により、将来「ら抜き」が「慣用 *usage*」の位置を占めることも大いにありうるが、いずれにせよたといその出発点が「試み」であってもそれが「慣用」されるに至れば、言語交通はその限り確実なものになる。もちろん別の「試み」は不断になされようし、そもそも言語交通が停滞し不通に陥る主な理由は決して「途方もない言葉」に求められるべきではない。後期の思索を必要とする所以だが、ともあれ前期の思索は「試み」から「慣用」に至る線で進展したと私には思われる。

以上を踏まえ、「ムーア」読解を始めよう。

108a いわゆる論理的な諸命題は、言語の、そしてそれゆえに世界の論理的な諸々の固有性を示すが、何も口に出さず[口に出して言わ]ない。LOGICAL so-called propositions *shew* [the] logical properties of language and therefore of [the] Universe, but *say* nothing.

「ムーア」読解に先立ち、『大論理学』と『資本論』を参照する。108aに対応するのは、それぞれ本質論第三編第一章「絶対的なもの」の「A 絶対的なものの開陳」の冒頭、第四章「貨幣の資本への転化」第一節「資本の一般的定式」の冒頭である。

<大> A 絶対的なものの開陳 一パラグラフ 第一文

絶対的なものは存在であるばかりでなく、また本質でもある。Das Absolute ist nicht nur das *Sein*, noch auch das *Wesen*.

<資> 第一節資本の一般的定式 一パラグラフ 第一文

商品流通は資本の出発点である。Die Waarencirkulation ist der Ausgangspunkt des Kapitals.

まず『大論理学』に即して「絶対的なもの」について確認する。

絶対的なものの単一な・しっかりとした同一性は無規定的である、換言すればこの同一性においては本質と現実存在あるいは存在一般の・ならびにまた反省のあらゆる規定態がむしろ解消されている。その限り絶対的なものとは何であるかということの規定する運動が否定的に欠落しており、そして絶対的なものそのものはあらゆる述語の否定として・空虚なものとしてのみ現われる。(p.219) <sup>(4)</sup>

「絶対的なものの単一な・しっかりとした同一性」において「本質と現実存在あるいは存在一般の・ならびにまた反省のあらゆる規定態がむしろ解消さ

れている」が、「解消されている aufgelöst」とは無に帰することではなく揚棄されているということだから、そして揚棄されたものは保存されているのだから、「絶対的なものは存在であるばかりでなく、また本質でもある」。なお後に参照する便宜のため、「絶対的なもの」に関する次の叙述も引いておこう。

しかしながら絶対的なものが何であるかということが呈示されるべきである；だがこの呈示する運動は、それによって絶対的なものの諸規定が生産するとされているような規定する運動でも外的反省でもありえない；それは開陳であり、しかも実に絶対的なものの固有の開陳である、またもつぱら絶対的なものが何であるかを示す運動なのである。(同)

次に「存在と本質」については次のように説かれる。

存在の真理態は本質である。／……(中略)……この(真理態の)認識は直接に本質のもとに・また本質のなかにみいだされるのではなくて、[本質にとっての]或る他者・すなわち存在から出発して、或る予備的な道を・すなわち存在をこえ出る運動あるいはむしろ存在へと入りこむ運動をなしている道を歩まなければならない。(p.15)

そこで『資本論』である<sup>(5)</sup>。「本質」が「或る他者・すなわち存在から出発する beginnt」ように、「商品流通(存在)は資本(本質)の出発点 Ausgangspunkt である」。換言すれば、「資本の認識は直接に資本のもとに・また資本のなかにみいだされるのではなくて、或る他者・すなわち商品流通から出発して、或る予備的な道を・すなわち商品流通をこえ出る運動あるいはむしろ商品流通へと入りこむ運動をなしている道を歩まなければならない」のである。そして資本とは「資本主義的生産様式の支配している諸社会 die Gesellschaften, in welchen kapitalistische Produktionsweise herrscht」(第1章第1節「商品の二つの要因」p.59. 傍点川崎)における「絶対的なもの」であるから、その「資本」においては「本質と現実存在あるいは存在一般の・

ならびにまた反省のあらゆる規定態がむしろ解消されており、それゆえ「絶対的なもの（資本）は存在（商品流通）であるばかりでなく、また本質（資本）でもある」のである。

「資本」が「商品流通」であり「資本」でもあることについては、「絶対的なもの」に関する以文社版訳者（寺沢恒信）の注 — 以下「寺沢注」 — が参考になる。

「絶対的なもの」には、一般的にいて、「相対的なもの」( $Y_1$ ) に対立している「絶対的なもの」( $X_1$ ) と、 $X_1$  と  $Y_1$  との対立を超えており・この対立を自己の内に包みこんでいる「絶対的なもの」( $X_0$ ) とがある。(p.380 注 2)

そして

絶対的なものが総体性として思いうかべられているのは、絶対的なものが、 $X_1$  と  $Y_1$  との対立を超えたもの・この対立を自己の内に包み込んだものとしてとらえられているからである。(p.381 注 4)

そうであれば『資本論』においては次が言える。

商品流通（存在）：「相対的なもの」( $Y_1$ )

商品流通に対立している資本（本質）：「相対的なもの」( $Y_1$ ) に対立している「絶対的なもの」( $X_1$ )

資本（絶対的なもの）： $X_1$  と  $Y_1$  との対立を超えており・この対立を自己の内に包みこんでいる「絶対的なもの」( $X_0$ )

「ムーア」である。「いわゆる論理的な諸命題」とは何か。「論理的命題」は哲学活動最初期からのウィトゲンシュタインの関心の対象であり（ラッセル宛の手紙 1913 年 11 月）、その基本的な理解は『論考』の次の叙述に表わされている。

3-33 論理的構文論においては、記号の意味は何ら役割を果たしてはならない；論理的構文論は記号の意味が問題になることなく立てられねばならず、諸表現の記述だけを前提しうる。

「命題 (文) Satz」と言えばその「意味 Bedeutung」に注意を向けるのが一般的だが、ウィトゲンシュタインが解明しようとするのは「意味」ではなく「命題」の「論理」である。このこと自体は理解するに困難ではない。

「ムーア」で問題は、「いわゆる論理的な諸命題 LOGICAL so-called propositions」とあること。何故に‘LOGICAL’と強調され、‘so-called’が付加されているのか。「いわゆる○○」とは、「○○」に関する理解が一般的なそれとずれを有する場合のことである。そして「いわゆる論理的な諸命題」は 108b および 108c と続く叙述から「固有の言語」の「諸命題」であり、しかしひとの普段手にする言語が、その「固有な言語」(特定共時態)・「論理的な言語」に対しては「非論理的な言語」であることはすでに述べた。そしてウィトゲンシュタインが考察しようというのは「非論理的な言語」でありその「論理的な固有性」である。すると「論理的な言語」の「論理的な諸命題」は、ウィトゲンシュタインの立場からは「いわゆる論理的な諸命題」にほかならない——「非論理的な言語」の「論理的な固有性」というのは形容矛盾の感があろう。だがさしあたり『資本論』に準えて「論理的な言語」：商品流通 (存在)、「非論理的な言語」：資本 (本質)、「非論理的な言語」：資本 (絶対的なもの) とすれば、「論理的な言語」に対立する限り「非論理的な言語」も、本来的に・すなわちその固有性において非論理的なわけではないことが示唆されよう。この立場からは、「論理的」であることは直接的・非媒介的にそのようにある。そして「相対的なもの」(Y<sub>i</sub>) に対立している「絶対的なもの」(X<sub>i</sub>) を「絶対的なもの」と呼ぶことに多少の違和を覚えるように、媒介されていない「論理」とは強調されてしかるべきであろう——。

次に「言語の、そしてそれゆえに世界の論理的な諸々の固有性を示す」について。「(言語、そしてそれゆえに) 世界」はさしあたり「絶対的なもの」である。そして「絶対的なものの単一な・しっかりとした同一性 die einfache gediegene Identität des Absoluten」は「絶対的なものの固有性」である

— *gediegen* : しっかりした ; 混ざり物のない — 。だから「言語の、そしてそれゆえに世界の論理的な諸々の固有性」において、「絶対的なものが何であるか *was das Absolute ist* ということが呈示され」、その呈示する運動 *das Darstellen* が「いわゆる論理的な諸命題」の「示す *shew*」運動、これである。したがって「いわゆる論理的な諸命題」は「開陳 *Auslegung* <sup>(6)</sup> であり、しかも実に絶対的なものの固有の開陳である」。固有性を示すのだから固有の開陳なのである。それは「絶対的なものが何であるかを示す運動 *ein Zeigen dessen, was es ist*」であり、或るものの「何であるか」はそのものの「本質」であるから、「絶対的なものの開陳（いわゆる論理的な諸命題）は「絶対的なもの（固有の言語）の本質」を示す <sup>(7)</sup>。

「何も口に出さない」について。「口に出す」とは或るものの「何であるか」を口に出す・すなわち「(本質) 規定する」ことである。だが「絶対的なものの単一な・しっかりとした同一性」においては「絶対的なものとは何であるか」ということを規定する運動 *ein Bestimmen* が否定的に欠落している」のだから、「何も口に出さない」。

かくしてここでも「絶対的なものの単一な・しっかりとした同一性」において「本質と現実存在あるいは存在一般の・ならびにまた反省のあらゆる規定態がむしろ解消されている」。ただし「解消されている *aufgelöst*」ことは存在しないことではない。存在しはするが、それが無いかのごとくなのである (*Aufgelöstheit* : 忘我)。それゆえ「(存在が自ずと) 示すが、(本質について) 何も口に出さない (規定しない)」のである <sup>(8)</sup>。

以上より 108a は次のように補って理解が容易になる : (現実存在する特定共時態の) いわゆる論理的な諸命題 (存在) は、(絶対的なものたる) 言語の、そしてそれゆえに世界の論理的な諸々の固有性(本質)を示すが、(本質たる) 何かを口に出しては言わない。そして「本質」の認識は「存在」から出発するのであるから、「いわゆる論理的な諸命題」(存在) は言語の「論理的な固有性」(本質) の「出発点」である。あるいは『資本論』に準えて言えば、「いわゆる論理的な諸命題は言語の、そしてそれゆえに世界の出発点である」。

108b このことは、ひとは論理的な命題をただ見るだけで、これらの諸々の固有性を知ることができることを意味している This means that by merely looking at them you can see these properties ; これに対して、固有の命題においては、何が真であるかをそれを見て知ることはできない。 whereas, in a proposition proper, you cannot see what is true by looking at it.

<大> A絶対的なものの開陳 一パラグラフ 第二文

前者は最初の反省していない直接態であり、後者は反省した直接態である Jene ist die erste unreflektierte Unmittelbarkeit, diese die reflektierte ;

<資> 第一節資本の一般的定式 一パラグラフ 第二文

商品生産、および発達した商品流通 — 商業 — は、資本が成立する歴史的前提をなす。 Waarenproduktion und entwickelte Waarencirkulation, Handel, bilden die historischen Voraussetzungen, unter denen es entsteht.

これ以降、「ムーア」『大論理学』『資本論』三者の叙述をはじめに掲げ、次いでその読みを説くというスタイルで稿を進める。

『大論理学』に謂う「前者」は「存在」、「後者」は「本質」である。つまり「絶対的なものの単一な・しっかりとした同一性」において、「存在は最初の反省していない直接態であり、本質は反省した直接態である」と謂うのである。ここでは両者の「直接態」であることが要点である。

『資本論』である。「最初の反省していない直接態」は「反省した直接態」の「前提をなす」。同様に、「商品生産、および発達した商品流通 — 商業 — は、資本が成立する歴史的前提をなす」。つまり、前提たる「商品生産、および発達した商品流通 — 商業」は「最初の反省していない直接態」、前提される「資本」は「反省した直接態」である。ともに「直接態」であることで両者は「対立」し(反省した・反省していない)、したがって「資本」は「絶

対的なもの」(X<sub>1</sub>)、「商品流通」は「相体的なもの」(Y<sub>1</sub>)である — なお言うまでもないが、「定立的反省は前提的反省であるが、しかし前提的反省として [ありながら] 端的に定立的反省である」(『大論理学』p.34) —。

「ムーア」である。「このこと this」は本稿の読解を通して、「論理的な命題」(いわゆる論理的な諸命題)が言語の「論理的な固有性」を示すが口に出さない、そのことであった。そして示される(開陳される)ものを、ひとは「ただ見るだけで、知ることができる」。つまり「論理的な固有性」を開陳する「論理的な命題」は、「最初の反省していない直接態」・「存在」である。

さて「論理的な固有性」の開陳は固有の開陳であり、だから「(いわゆる)論理的な命題」は「固有の命題 a proposition proper」である — 現代日本語において「行ける」が「本来の命題」である所以 —。「何が真であるか(何がそのものの真理態・本質であるか)をそれ(固有の命題)を見て知ることができない」のは、「固有の命題」が「最初の反省していない直接態」・「存在」であるのに対し、「本質は反省した直接態である」からである — 「見て知る」のではなく、「反省して知る」のである —。つまり 108b もまた、第一文が「最初の反省していない直接態」について、第二文が「反省した直接態」について述べている。

「ムーア」の叙述を具体的にイメージすべく、言語事実を参看しよう。まず語「(ただ)見る(だけで) by merely looking」に留目する。「論理的な命題を見る」というのだから命題は文字で表わされている。そこで同じ命題が発話されたとすれば、「(ただ)聞く(だけで)」であり、上に引いた *Messieurs!* が具体例となる。「ムーア」を読解する要所であるので、『講義』を再掲する。

ある講演の席で、たびたび *Messieurs!* という語を連発するのを聞いたばあい、そのつどそれは同じ表現であるとの感じをもちはずるものの、言い場所によって口調のちがいや抑揚のために、はなはだしい音的差異が現われる — そのはなはだしきは、ほかのばあいならばべつの語を区別させるほどである(参照、*pomme* と *paume*、*goutte* と *je goûte*、*fuir* と *fouir*、etc.) (p.151)



「音的差異のはなはだしさは、ほかのばあいならばべつの語を区別させるほどである」にもかかわらず、だから別語なのだと言手は決して言わない。すると *Messieurs!* を *Messieurs!* と理解するのは経験的にはない。*Messieurs!* は「(いわゆる) 論理的な命題」なのであり、「ひとはこれをただ聞くだけで、その固有性 (他ならぬ *Messieurs!* であること・すなわち「*Messieurs!* は *Messieurs!* である」こと・同語反復)を知ることができる」のである。そして「聞く」や「見る」は表象作用 *Vorstellen* であり、表象作用において直ちに知られる「固有性」は「最初の反省していない直接態」である。

さて「ほかのばあいならばべつの語を区別させるほど」の口調や抑揚でありながら、*Messieurs!* を「ただ聞くだけで、その固有性を知る」ひとは、それを聞いて「べつの語」だと思ふことができない。他の例で言えば、現代日本語の撥音「ん」は「さんあい (三愛)」「さんがい (三階)」「さんばい (三倍)」「さんばい (参拜)」「さんまい (三枚)」でそれぞれ別の音である。しかし日本人は各種の「ん」をそれとして聞き分けることができず、「ん」は一つの撥音である — 「ん」は「ん」である・同語反復 —。これに対して撥音という括りをもたない外国人は、それぞれの「ん」を別音として聞く。このように、*Messieurs!* を聞くフランス人や「さんあい」等を聞く日本人は「固有の命題において、何が真であるかをそれを聞いて知ることはできない」。ここでは「真であること」は「反省した直接態」なのである。

108c 何がこの論理的な諸々の固有性であるかを口に出す [口に出して言う] ことは不可能である、というのは、そうするためには件の諸々の固有性をもたない言語が必要であり、そしてこの言語が固有の言語であることは不可能だから。It is impossible to say what these properties are, because in order to do so, you would need a language, which hadn't got the properties in question, and it is impossible that this should be a proper language. 非論理的な言語を構成することの不可能。Impossible to construct [an] illogical language.

<大> A絶対的なものの開陳 一パラグラフ 第三文

さらにそれぞれが自分自身のもとで総体性であるが、しかし一つの規定された総体性である。jedes ist ferner Totalität an ihm selbst, aber eine bestimmte.

<資> 第一節資本の一般的定式 一パラグラフ 第三文

世界商業および世界市場は、一六世紀に資本の近代的生活史を開く。  
Welthandel und Weltmarkt eröffnen im 16. Jahrhundert die moderne Lebensgeschichte des Kapitals.

『大論理学』で「それぞれ」とは「最初の反省していない直接態」と「反省した直接態」とである。この両者が「対立」することはすでに述べたが、かく対立することにおいてそれぞれは「総体性」である。「絶対的なもの」( $X_0$ )が「総体性」であることは先の寺沢注に説かれていた。すると「絶対的なもの」( $X_1$ )もまた同じ「絶対的なもの」であるのだから「総体性」である。そして「絶対的なもの」( $X_1$ )に対立する「相対的なもの」( $Y_1$ )も「自分自身のもとで an ihm selbst 総体性である」。なぜなら「対立において規定された反省・区別が完成される vollendet」(『大論理学』 p.67) のだからである。かくして  $X_1$  と  $Y_1$  の「それぞれが自分自身のもとで総体性であるが、しかし一つの ( $X_1$  あるいは  $Y_1$ ) と 規定された総体性である」。

『資本論』である。「資本」は「絶対的なもの」として「総体性」である。また「世界商業および世界市場」も世界規模の「商品流通」として「総体性」であり、すなわち「相対的なもの」( $Y_1$ ) である。そして  $Y_1$  は「絶対的なもの」( $X_1$ ) すなわち「資本」と対立し、それぞれが「一つの規定された総体性である」から、「世界商業および世界市場は、一六世紀に資本の近代的生活史を開く eröffnen」と説かれる。eröffnen は契機として何事かを開く謂いである — ‘ein Testament eröffnen’ (遺言状を開く) ・ ‘In diesem Beruf eröffnen sich dir ganz andere Chancen.’ (この職業に就けばまったく別のチャンスが生まれる) —。つまり「世界商業および世界市場」が契機として「資本の近代的生活史を開く」のである。

「ムーア」を「さんあい」等の言語事実に即して読み解く。まず「この論理的な諸々の固有性」とは本稿の例に即して「*Messieurs!* は *Messieurs!* である」・「ん」は「ん」である」という「同語反復」である。そして「何がこの論理的な諸々の固有性であるかを口に出す [口に出して言う]」ためには、その固有性の何であるかを「知る」必要がある。だが「はなはだしい音的差異を超えてそれは同じ表現であるとの感じをもつ」日本語話者は、むしろそのゆえに「(撥音の同語反復を) 口に出すことは不可能である」——日本語話者間の、いわば「ん」の取り引き *Handel* は総体的である。すなわち「最初の反省していない直接態」たる特定共時態は「一つの (そのように) 規定された総体性」である——。これに対して外国語話者は例えば「さんあい」と「さんがい」が別の音であることを聞き分ける (何が「さんあい」等の論理的な固有性であるかを口に出して言うことが可能である)。それは「このことを口に出して言う言語 (日本語に対立する外国語) が件の固有性 (同語反復・「ん」は「ん」である) をもたない」からである。そうであれば「この言語 (外国語) が固有の言語 (日本語) であることは不可能」である。だが日本語の論理的な固有性からすれば、「件の固有性」をもたない言語は「非論理的な言語」であり、その日本語は外国語には可能である「何が当の論理的な固有性 (撥音の同語反復) であるかを口に出して言うことは不可能である」のだから、「(固有の言語が) 非論理的な言語を構成することの不可能」と謂われる。

以上を『大論理学』に準えて言えば、日本語と外国語は「それぞれが自分自身のもので総体性であるが、しかし一つの (日本語ないし外国語と) 規定された総体性である」。また『資本論』に準えて、「日本語は、外国語を開く」——さらに位相語を想起して、「或る位相語は、他の位相語を開く」。前者に大人言葉・後者に若者言葉を置けば、「行けられる」の逸話はその一例である——。

108d 口に出すことのできるすべてのものを表現しあるいは口に出す [口に出して言う] ことができる言語をもつためには、この言語は或る一定の

諸々の固有性をもたなければならない In order that you should have a language which can express or *say* everything that *can* be said, this language must have certain properties ;そしてその場合には、この言語が当の諸々の固有性をもつことは、この言語においてもはや口に出す〔口に出して言う〕ことができない、あるいはどんな言語においても。and when this is the case, *that* it has them can no longer be said in that language or *any* language.

<大> A絶対的なものの開陳 一パラグラフ 第四文

本質のもとでは存在は現実存在として現われでる、そして存在と本質との関係は自己を規定して内のものと外のものとの相関にまで進んだのである。Am Wesen tritt das Sein als *Existenz* hervor, und die Beziehung von Sein und Wesen hat sich bis zum Verhältnisse des *Inneren* und *Äußeren* fortgebildet.

<資> 第一節資本の一般的定式 二パラグラフ

商品流通の素材的内容、すなわちさまざまな使用価値の交換を度外視して、この過程が生み出す経済的諸形態だけを考察するならば、われわれは、この過程の最後の産物として、貨幣を見いだす。Sehen wir ab vom stofflichen Inhalt der Waarencirkulation, vom Austausch der verschiedenen Gebrauchswerthe, und betrachten wir nur die ökonomischen Formen, die dieser Proceß erzeugt, so finden wir als sein letztes Produkt das Geld. 商品流通のこの最後の産物が、資本の最初の現象形態である。Dies letzte Produkt der Warencirkulation ist die erste Erscheinungsform des Kapitals.

「現実存在」について『大論理学』は次のように説く。

本質は現象せざるをえない。／存在は絶対的な抽象態である。この否定態は存在にとって外的なものではない、そうではなくてこの絶対的否定態

としてのみ存在は存在であり、存在以外のなにものでもない。この絶対的否定態のゆえに存在は自己を揚棄する存在としてのみあり、かくて本質である。だが逆に本質は自己との単一な相等性として同じくまた存在である。…… (中略) ……本質が自己をそれたらしめるこの存在は本質的存在・すなわち現実存在である。否定態と内面態とから外に出ている存在[である]。  
(p.147)

また「内のものと外のものとの相関」は『大論理学』で「絶対的なものの開陳」に直前して説かれている。

『資本論』が「商品流通の素材的内容、すなわちさまざまな使用価値の交換を度外視する」と説くとき、それは第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」冒頭の次の記述にかかわっている。

商品は、一見、自明な、平凡な物らしく見える。商品の分析は、商品が形而上学的なつべこべと神学的なしかつめらしきとに満ちた非常にやっかいな代物であることを明らかにする。商品が使用価値である限り、その諸属性によって人間の諸欲求を満たすという観点から見ても、あるいは、人間的労働の生産物としてはじめてこれらの諸属性を受け取るという観点から見ても、商品には神秘的なものはなにもない。人間がその活動によって自然素材の諸形態を人間にとって有用な仕方に変えるということは、感性的に明らかなことである。たとえば、木材でテーブルが作られれば、木材の形態は変えられる。にもかかわらず、テーブルは相変わらず木材であり、ありふれた感性的なものである。ところが、テーブルが商品として登場するやいなや、それは感性的でありながら超感性的な物 *ein sinnlich übersinnliches Ding* に転化する。それは、その脚で床に立つだけでなく、他のすべての商品にたいしては頭で立ち、そしてその木の頭から、テーブルがひとりでに踊りだす場合よりもはるかに奇妙な妄想を展開する。  
(p.121)

つまりいま「労働生産物」は「神秘的性格」(p.122)を有する「商品形態

Waarenform」(p.123)として把握され、「この(商品流通)過程が生み出す経済的諸形態 die ökonomischen Formen」とはこれである。その商品は論理的には「物自体 Ding an sich」・「自己との単一な相等性 die einfache Gleichheit mit sich」である<sup>(9)</sup>。「価値関係 Werthverhältniß」(p.82)において「価値対象性を受け取る」(p.125)商品は、それゆえ「価値物 Werthding」(同)としては「揚棄された媒介によって現存する・本質的な直接的なものとしての現実存在するもの das Existierende als das durch die aufgehobene Vermittlung vorhandene, wesentliche Unmittelbare」(『大論理学』p.154)だからである — すなわち「媒介」(価値関係)の「揚棄」において「現実存在するもの(物)」が「価値物」である — 。そして商品は商品と貨幣商品である。

これまでに考察された商品流通の直接的形態においては、同一の価値の大きさがつねに二重に存在した。一方の極における商品と対極における貨幣と。(p.228)

さらに、一方の「貨幣」が「この(商品流通)過程の最後の産物として見いだされる」こともすでに説かれていた。すなわち第3章「貨幣または商品流通 Das Geld oder die Waarencirkulation」の第3節「貨幣 Geld」であり、この定冠詞のない Geld は第1節「価値の尺度 Maß der Werthe」・第2節「流通手段 Cirkulationsmittel」を承ける「第三の規定における貨幣」(p.219 訳者注)である — 「価値尺度としての貨幣 Geld als Werthmaß」(p.160)は論理的には「全体と諸部分との相関」である<sup>(10)</sup>。また「流通手段という機能 Funktion des Cirkulationsmittels」(p.194)をもつ「貨幣」はその「流通 Umlauf」(同)において「(流通)運動の連続性 Continuität der Bewegung」(p.196)を担っており、そこに「力とその発現との相関」の論理が見出される<sup>(11)</sup>。これらを承けて、「第三の規定における貨幣」における「外のもの」と内ものとの相関」の論理であった — 。それは「支払手段 Zahlungsmittel」として「一つの媒介されない[直接的]矛盾を含んでいる」(p.233)。

支払手段としての貨幣の機能は、一つの媒介されない〔直接的〕矛盾を含んでいる。諸支払いが相殺される限り、貨幣はただ観念的に、計算貨幣または価値尺度として機能するだけである。現実の支払いが行なわれなければならない限りでは、貨幣は、流通手段として、すなわち、素材変換のただ一時的媒介的な形態として登場するのではなく、社会的労働の個別的な化身、交換価値の自立的な定在、絶対的商品として登場する。この矛盾は、生産恐慌・商業恐慌中の貨幣恐慌と呼ばれる時点で爆発する。(同)

すなわち「内のもの」と「外のもの」とが直接的に統一されることによる「矛盾」だが<sup>(12)</sup>、そこで「商品流通のこの最後の産物（貨幣）が、資本の最初の現象形態である」と説かれる。「資本」もまた「内のもの」と「外のもの」との直接的統一において把握されて「矛盾」に陥るからである。『資本論』は謂う。

資本は、流通から発生するわけにはいかないし、同じく、流通から発生しないわけにもいかない。資本は、流通のなかで発生しなければならないと同時に、流通のなかで発生してはならないのである。Es muß zugleich in ihr und nicht in ihr entspringen. (p.283)

つまり「内のもの」と「外のもの」とが直接的に統一されることで「内的な規定が絶対的なものを貫徹していない」(『大論理学』p.225)のである。

「ムーア」である。『資本論』の「商品流通の素材的内容、すなわちさまざまな使用価値の交換の度外視」に準えうる言語とはどのようなものだろうか。ここでも「行けられる」がその例をなす。そもそもそれを「途方もない言葉」とみなす脚本家はなぜ「行けられる」を理解することができるのか。「行けられる」がまったく未知の言語であれば、聞手はそれを「行ける」の誤用だとすら言うことはできない。それが「行ける」を規範にして「途方もない言葉」と呼ばれるその限り、「行けられる」の価値すなわち「行ける」と同じ「可能」のニュアンスが脚本家によって理解されている。ただ「行ける」と「行けられる」とではそのニュアンスを表わすいわば「素材的内容」が異なって

いる。だから「行けられる」の交通する言語において、「素材的内容、すなわちさまざまな能記の交換は度外視」されている。そして「この言語」が、特定共時態とは区別されるところの、「口に出すことのできるすべてのものを表現しあるいは口に出す〔口に出して言う〕ことができる言語」であることはすでに述べた。

次に、「この言語がもたなければならない」ところの「或る一定の諸々の固有性」である。「行けられる」の交通する「この言語」が特定共時態（固有の言語）でないことは上述した。そうであれば、「この言語がもたなければならない」ところの「或る一定の固有性」は、「固有の言語」のもつ「固有性」（同語反復）ではありえない。それは如何なるものか。この点を理解するために、『資本論』の叙述を参照する。「W-G-W」を商品の変態の視点からとらえれば第一の変態「W-G」（販売）と第二の変態「G-W」（購買）だが、次はその後者について説いている。

[ここでは] 運動の連続性はまったく貨幣の側に帰することになり、商品にとっては二つの相対立する過程を含むその同じ運動が、貨幣自身の運動としては、つねに同じ過程を、すなわち貨幣がつねに別の商品と行なう場所変換を、含む。それゆえ、商品流通の結果である別の商品による商品の置き換えは、商品自身の形態変換によって媒介されるのではなく、流通手段としての貨幣の機能によって媒介されるものとして現われ、流通手段としての貨幣が、それ自体としては運動しない諸商品を流通させ、諸商品を、それらが非使用価値である人の手からそれらが使用価値である人の手へと — つねに貨幣自身の進行とは反対の方向に — 移すものとして現われる。(p.196)

商品と貨幣とが「二重に存在する」と同様に、「行ける」・「行けられる」とその価値（「可能」のニュアンス）もまた「二重に存在する *doppelt vorhanden*」。そして第二の変態「G-W」において貨幣が「運動の連続性」を担うように、言語交通する「行けられる」の「行ける」との「連続性」は、両者を媒介する「可能」のニュアンスによって担われている。「この（「行けられる」の交



通する) 言語は一定の諸々の固有性をもたなければならない」と謂われる、その「固有性」とはこの「可能」のニュアンス (内のもの) にほかならない。

「ムーア」第二文「そしてその場合には、この言語が当の諸々の固有性をもつことは、この言語においてもはや口に出す [口に出して言う] ことができない、あるいはどんな言語においても」は、『資本論』第二文「商品流通のこの最後の産物が、資本の最初の現象形態である」に対応する。「この(「行けられる」の交通する) 言語」は確かに特定共時態 (固有の言語) ではない。けれどもそれは脚本家を聞手に交通しており、その脚本家の言語は特定共時態である。だから「この言語」のもつ「固有性」・すなわち「可能」のニュアンスは、「貨幣」が「この(商品流通) 過程の最後の産物」であるのと同様、特定共時態 (脚本家の言語) のいわば「最後の産物」である。つまり「別の商品による商品の置き換え Ersatz」が「貨幣の機能によって媒介されるものとして現われる」ように、「この言語」の「固有性」により媒介されるものとして現われるのが「行ける」と「行けられる」との「置換 substitution」である。『講義』は説いている。

共時論的「現象」は通時論的なものとの共通点を一つももたない；一は同時的要素間の関係であり、他は時間における要素と要素との置換、つまり事件である。(p.127)

説かれるように、「行ける」と「行けられる」との「置換」は「通時論的なもの」である。つまり「この(「行けられる」の交通する) 言語」は、一面では「最後の産物」を産む共時態であるが、他面では通時態なのである。「固有の言語」(特定共時態) が自らの「固有性」を「口に出す」ことのできないこと、「そうする」ことのできるのは「(固有の言語を基準に) 非論理的な言語」であること、これらは 108c に説かれた。そこで「この言語が当の諸々の固有性をもつことは、この言語においてもはや口に出す [口に出して言う] ことができない、あるいはどんな言語においても」、と言われる。なぜなら「この言語」は共時態かつ通時態であり、それゆえ「この言語」を基準にしての「非論理的な言語」なるものは存在しえないからである。けれどもそれが共時論

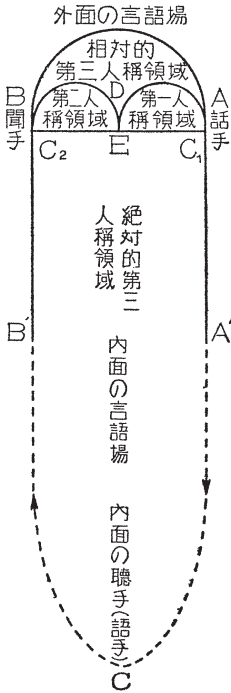
的でありかつ通時論的であるとき、言語もまた「一つの媒介されない〔直接的〕矛盾を含んでいる」だろう。「二つの観点 — 共時論的と通時論的 — の対立は、絶対的であって、妥協をゆるさない」（『講義』 p.117）からである。

さて言語交通における「内のものと外のものとの相関」にまで進んだことを機縁に、次の言語把握を見ておこう。森重敏の『日本文法通論』 — 以下『通論』と略 — である。

伝達はどのようにして行なわれるであろうか。相対する話手と聞き手とは本来別々の人間であり、事実相互に絶対に異なる〈個人〉である。個人はそれぞれの個性をもち、どこまでも一致することのできない断絶で隔てられている。その限りでは言語内容は伝達のしようのないものである。ところがそれにもかかわらず、このような個人が同時に事実〈社会人〉でもある。人間は、ひとりびとりの〈ひと〉であるとともに、人間のひとである。断絶は同時にまたどこかで連続しているのでなければならない。そして伝達が事実行なわれえている以上、この連続はどこかに実在しているはずである。また断絶が同時に連続してもいる以上、伝達は、断絶を断絶としながらもそれを超えて連続するはずである。それは、例えば物体において、熱などが一方から他方へと全然連続的に〈伝導〉するのとは異なる関係である。（『通論』 p.1）

森重は伝達を次の【図 1】（同 p.8）で表現する。これが『講義』（p.24）掲載の【図 2】を精緻にしたものであることは言うまでもない。

「行ける」「行けられる」はそれぞれ伝承形 *forme transmise* と競争者 *un concurrent* であるから（『講義』 p.228）直接には「どこまでも一致することのできない断絶で隔てられている」が、脚本家が「行けられる」を理解するように、「断絶は同時にまたどこかで連続しているのでなければならない」。そしてその連続 — これは言うまでもなく『資本論』での「運動の連続性」に対当する — が「言語場内面」に存する「内面の聴手（語手）・すなわち「内のもの」においてあることは【図 1】の示すところである。『通論』は説く。



【図1】



【図2】

(図1の) Cというのは、断絶している各個人のうちに存して相互を連続する共同連帯的な社会性であり、一層明確に約言すれば、AB 各個人がそれぞれにもつ社会的客観性>であるということが出来る。それは、AB 各人が個人としての断絶においてもつ個人的主観性>に対して実在するものである。しかもその主観性を個人的断絶の閉鎖から救い、社会的連続へ開放する通路となる。私的な個人的主観性は、それによって公的な社会的客観性を得ることになるのである。伝導ならぬ伝達は、このような社会的客観性を通してこそ、はじめて真に伝達である。

(p.2)

その「社会的客観性」——「行けられる」・「行ける」を交換せしめる「可能」のニュアンス——の論理的把握は先の課題であるが、『通論』の言語観と「ムーア」のそれと、両者が親近することは明らかであろう——ただし『通論』執筆時の森重が「ムーア」を「読んだ」ことはない——。

108e 非論理的な言語とは、そこでは、例えば、出来事を穴の中に押し込むことができるような言語であろう。An illogical language would be one in which, e.g., you could put an *event* into a hole.

<大> A絶対的なものの開陳 一パラグラフ 第五文

内のものは本質である、だが存在へと関係づけられておりかつ直接的に存在であるという規定を本質的にもっている総体性として[の本質である]。Das *Innere* ist das *Wesen*, aber als die *Totalität*, welche wesentlich die Bestimmung hat, auf das *Sein bezogen* und unmittelbar *Sein* zu sein.

<資> 第一節資本の一般的定式 三パラグラフ 第一文

歴史的には、資本は、どこでも最初はまず貨幣の形態で、貨幣財産すなわち商人資本および高利貸資本として、土地所有に相対する。Historisch tritt das Kapital dem Grundeigentum überall zunächst in der Form von Geld gegenüber, als Geldvermögen, Kaufmanskapital und Wucherkapital.

『資本論』である。ここでの「貨幣」すなわち「商品流通の最後の産物」は直接には第3節「貨幣」の「c 世界貨幣 Weltgeld」である。それは「富一般(“普遍的富”)の絶対的社会的物質化 absolut gesellschaftliche Materiatuur des Reichthums überhaupt (universal wealth)」(p.244)として「局地的形態 Lokalforn」(p.242)を脱しており、したがって「土地所有 Grundeigentum」に相対する — Vermögen と Eigentum の対比に注意 —。「相対する」とは次の謂いである。「資本」が「絶対的なもの」(X<sub>1</sub>)として「本質」であることは上に述べた(108a)。だから「資本」は「内のもの」であり、だがそれは「総体性としての本質」である。つまり — 原文の語順通りに訳して — 「歴史的には、資本は、土地所有に相対する」が、これは「資本」(本質)が「存在(土地財産)へと関係づけられている」ということである。そしてそのような「資本」は「どこでも最初はまず貨幣財産すなわち商人資本および高利貸資本」だが、これは「本質」がまた「直接的に存在(貨幣財産)である」という規定を本質的にもっている」からにほかならない。このように「土地所有に相対しかつ貨幣財産である」、そうした「資本」は「総体性としての本質」である。

「ムーア」である。「出来事 event ; événement」について、『講義』の次

の叙述を再掲する(邦訳書で *événement* は「事件」と訳す)。

共時論的「現象」は通時論的なものとの共通点を一つももたない *C'est que le "phénomène" synchronique n'a rien de commun avec le diachronique* ; 一は同時的要素間の関係であり、他は時間における要素と要素との置換、つまり事件である。 *l'un est un rapport entre éléments simultanés, l'autre la substitution d'un élément à un autre dans le temps, un événement.* (p.127)

「行けられる」——可能性の形態——が発せられ、それと「行ける」の「置換、つまり出来事」が生じた。その「出来事を穴の中に押し込む[突っ込む]」ということは、「外のもの」たる「行けられる」が「(穴の) 内のもの」と「関係づけられる」。『資本論』に準えれば、「内のもの(「可能」のニュアンス)は、どこでも最初はず外のもの(競争者)で、「行けられる」(可能の *möglich* 形態)として、「行ける」(固有の *eigentlich* 形態)に相對する」のである。「貨幣」が「資本の最初の現象形態」であるのは、それが「存在」として土地所有に相對するからであった。同じく「行けられる」は「行ける」に相對することで共時論的「現象」・すなわち通時論の「最初の現象形態」である。「出来事」についてさらに詳しく見ておこう。

通時論的事実は、なんらある価値をべつの記号をもってしるすことを目的とするものではない：*gasti*が *gesti*, *geste* (*Gäste*) となったという事実は、実体詞の複数をねらったものではない；*tragit*→*trägt*では、おなじウムラウトが動詞屈折に作用している、といったぐあい。それゆえ、通時論的事実はそれじたいのうちに存在理由をもつ事件であって、それから生じうる個々の共時論的帰結は、それとはぜんぜん無関係のものである。(p.119)

そして

言語というものは、われわれがややもすれば抱きたがる謬想とはうらはらに、表現すべき概念を顧慮して創造され・配備された機構ではない。われわれはかえって、変化から生じた状態は、それがあらたに取り込んだ意義をしるすべく運命づけられたものではない、と見るのである。ある偶生的状態 *un état fortuit* が与えられた：*fōt: fēt*が、するとひとはこれを、単数・複数の別を立てるために流用する *s'empare* のである；*fōt: fēt* は *fōt: \*fōti* に比べてべつに出色のものとも思えない。おのおのの状態において、与えられた資料に魂が吹きこまれ、活が入れられるのだ。(p.120)

無論同じことは「行ける」が「行けられる」になったという事実についても言え、「行く：行けられる」は「行く：行ける」に比べてべつに出色のものとも思えない *n'est pas mieux fait*」。にもかかわらず、「行けられる」に「魂（「可能」のニュアンス）が吹きこまれ、活が入れられるのである」——ただし *fōt: fēt* が「社会によって受け入れられて、言語事実となった」（『講義』p.137）のに対し、「行けられる」はなお「途方もない言葉」に留まっている、という差異は存する——。「出来事を穴の中に押し込む [突っ込む]」とはこのことである<sup>(13)</sup>。かくして「可能」のニュアンスはいま「存在（行ける）へと関係づけられておろかつ直接的に存在（行けられる）であるという規定を本質的にもっている総体性」だが、「固有の（本来の）*proper* 言語」は存在でなく本質なのだから、「行けられる」が「行ける」に相対する言語は「非論理的な言語」である。

108f したがってすべてのことを表現できる言語は世界の一定の諸々の固有性を反映し、その諸々の固有性は自分がもたなければならない諸々の固有性なのである *Thus a language which can express everything mirrors certain properties of the world by these properties which it must have ;* そしていわゆる論理的な命題はそうした諸々の固有性を体系的な仕方において示す。and logical so-called propositions shew *in a systematic way* those properties.

<大> A絶対的なものの開陳 一パラグラフ 第六文

外のものは存在である、だが反省へと関係づけられておりかつ直接的にはまたまさに本質との相関を欠いた同一性であるという本質規定をともなった[存在である]。Das *Äußere* ist das *Sein*, aber mit der wesentlichen Bestimmung, auf die *Reflexion bezogen*, unmittelbar ebenso verhältnislose Identität mit dem Wesen zu sein.

<資> 第一節資本の一般的定式 三パラグラフ 第二・三文

とはいえ、貨幣を資本の最初の現象形態として認識するためには、資本の成立史を回顧する必要はない。Jedoch bedarf es nicht des Rückblicks auf die Entstehungsgeschichte des Kapitals, um das Geld als seine erste Erscheinungsform zu erkennen. 同じ歴史が、日々、われわれの目の前で繰り広げられている。Dieselbe Geschichte spielt täglich vor unsren Augen.

『資本論』である。「土地所有に相對する」ところの「貨幣」はそれ自身が「外のもの」・「存在」だが、それは「資本の最初の現象形態」として「本質規定をともなった存在」である。「現象」とは次のように説かれるからである。

現象はまずはじめには自分の現実存在における本質である。本質は直接に現実存在のもとに現存している。現実存在が直接的な現実存在ではなくて反省した現実存在であるということが現実存在のもとでの本質の契機をなしている。換言すれば本質的な現実存在としての現実存在が現象である。

(p.174)

「本質」たる「資本の最初の現象形態」として、「貨幣」は「本質的な現実存在としての現実存在 die Existenz als *wesentliche Existenz*」だが、これすなわち「本質規定をともなった存在」にほかならない。さて「直接的な現実存在ではなくて反省した現実存在である」、そのような「現実存在」が「現象」なのだから、「貨幣」もまた「反省へと関係づけられている」。そして「反省

した現実存在」(貨幣)のもとに「本質(資本)は直接に現存している」のだから——これは上述の「自己自身との否定的媒介としてとらえられた物」(資本)の否定的契機が「貨幣」だということである——、「資本の成立史を回顧する必要はない」。そして「資本が直接に(媒介なしに)貨幣のもとに現存している *unmittelbar an ihr vorhanden*」ということは、「貨幣」(存在)が「直接的にはまたまさに本質(資本)との相関を欠いた(媒介なしの)同一性である *unmittelbar ebenso verhältnislose Identität mit dem Wesen zu sein*」ということだから、「同じ歴史(相関を欠いた同一性)が、日々(直接的に)、われわれの目の前で繰り返らされている(現存している)」と謂われる。

「ムーア」は「行けられる」の例に即して読むことができ、その類推的創造について『講義』は次のように説く(語例は日本語の場合に変えてある)。

「行ける」のひかえる「行けられる」の出現を説明するには、他の諸形に訴えねばならない、それは比例四項式が示すとおりである：

「食べる」：「食べられる」＝「行ける」： $x$

$x$ ＝「行けられる」

そしてこの結合は、精神が、それを組み立てる諸形を、それらの意味によって連合せしめないかぎり、なんらの存在理由ももたないであろう。(p.230)

あらかじめ注意しておけば、ここでの「行ける」は、「日常的に「ら抜き」で話している人にとって、そこに「can」のニュアンスはこもっていない、そのようなものとしての「行ける」である。

いま「すべてのことを表現できる言語」は「行ける」と「行けられる」を「置換」する言語であり、したがって「外のもの」・「存在」である。それは「(日本語)世界の一定の諸々の固有性を(連合を通して)反映し」(反省へと関係づけられており)——**Reflexion**：反映、反省——、かつ「その諸々の固有性は自分がもたなければならない諸々の固有性なのである」(直接的にはまたまさに本質との相関を欠いた同一性であるという本質規定をともなった存在である)。すなわち「食べる：食べられる」へと関係づけられて「行けられる」が創造され、かつその「行ける：行けられる」は「試み」である(相



関を欠く・直接的な現存)が、なお日本語と交通しうる(本質との同一性である)、それが「すべてのことを表現できる言語」である。

次に第二文「いわゆる論理的な命題はそうした諸々の固有性を体系的な仕方において示す」。「体系的な仕方」が「比例四項式」であることは『講義』の説く通りである。そしてその比例四項式(結合)をあらしめる「連合関係 rapport associatif」は「言語状態 un état de langue」すなわち共時態で「働く(機能する) fonctionnent」(『講義』p.172)のだから、すなわち「日々、われわれの目の前で繰り広げられている」。なおここでの言語は(特定)共時態なのだから、「いわゆる論理的な命題」への言及である。

108g 通常論理的な命題はこれらの諸々の固有性を次のように示す How, usually, logical propositions do shew these properties is this : ある種のシンボルの一定の記述を与える We give a certain description of a kind of symbol ; 他のシンボルが一定の仕方では結合され、それらが先の記述のシンボルを産むことをわれわれは発見する we find that other symbols, combined in certain ways, yield a symbol of this description ; そしてこれらのなすことがこれらのシンボルに関する何かを示す。and *that they do shews something about these symbols.*

<大> A絶対的なものの開陳 一パラグラフ 第七文

絶対的なものそのものはこれら両者の絶対的統一である Das Absolute selbst ist die absolute Einheit beider ;

<資> 第一節資本の一般的定式 三パラグラフ 第四文

新たな資本は、いずれも、まずもって、いまなお貨幣——一定の諸過程を経てみずからを資本に転化すべき——として、舞台に、すなわち商品市場、労働市場、または貨幣市場という市場に登場する。Jedes neue Kapital betritt in erster Instanz die Bühne, d.h. den Markt, Waarenmarkt, Arbeitsmarkt oder Geldmarkt, immer noch als das Geld, Geld, das sich

durch bestimmte Prozesse in Kapital verwandeln soll.

『大論理学』は「絶対的なものそのもの *das Absolute selbst*」について次のように説く。

内のものと外のものとのこの統一が絶対的現実性である。Diese Einheit des Inneren und Äußeren ist die *absolute Wirklichkeit*. だがこの現実性はまずはじめには絶対的なものそのものである、— 現実性が統一として定立されており、そしてこの統一のなかでは形式が揚棄されてしまって・外のものと内のものであるという空虚なまたは外的な区別になってしまっているその限りでは [そうである]。Diese Wirklichkeit aber ist *zunächst das Absolute als solches*, — insofern sie als Einheit gesetzt ist, in der sich die Form aufgehoben und zu dem *leeren oder äußeren Unterschiede* eines Äußeren und Inneren gemacht hat. (p.217)

そこで第七文だが、「これら両者」とは「本質」であるところの「内のもの」および「存在」であるところの「外のもの」であるから、するとその「両者の絶対的統一」とは「そのなかでは形式が揚棄されてしまって・外のものと内のものであるという空虚なまたは外的な区別になってしまっている」、そのような「統一」である。「外的な区別」なのであるから次の第八文へとスムーズに繋がる。

『資本論』である。「まずもって *in erster Instanz*」というのは、上に引いた『大論理学』が「まずはじめには *zunächst*」と説くのに対応する。つまり「新たな資本」は「絶対的なものそのもの」であり、そこでは「区別」が「空虚なまたは外的な区別になってしまっている」。ここに謂う「区別」は次文に説かれる「貨幣としての貨幣」と「資本としての貨幣」とである。つまり「資本」は「いまなお貨幣」だが、「一定の諸過程を経てみずからを資本に転化すべき soll」、そのような「貨幣」なのである。それが「当為」であるということとは、「存在」(外のもの・貨幣)と「本質」(内のもの・資本)とが「外的な区別」においてあるということである<sup>(14)</sup>。

「ムーア」の説く「示し方」の例を挙げる。(1)「ある種のシンボルの一定の記述を与える」、例えば「ある種のシンボル」 $x$ に記述「**「可能」**のニュアンス」を与える — これにより  $x$  は「**「可能」**のニュアンス」をもつべきことになる —。(2)「他のシンボルが一定の仕方で結合され、それらが先の記述のシンボルを産む」、すなわち「行ける」「食べられる」「食べる」が比喩四項式「食べる：食べられる＝行ける： $x$ 」で結合され — 「食べる」等は「群衆 *un personnage collectif*」(『講義』p.228)である —、「可能」のニュアンスをもつ「 $x$ ＝行けられる」が言語交通に登場する。

そこで「ムーア」を『資本論』に準えて書き換える：新たなシンボルは、いずれも、まづもって、いまなおある種のシンボル — 他のシンボルとの一定の仕方での結合を経てみずからを(本質としての)シンボルに転化すべき — として、言語交通に登場する。ここでも「当為」において「存在(外のもの)と「本質」(内のもの)とは「**外的な区別**」であるから、「ある種のシンボル」(外のもの)が「(本質としての)シンボル」(内のもの)である(転化する)ことは「われわれが(流用において)発見する *find*」のである。つまり「外のもの」と「内のもの」との「統一」はやはり「まづもって」のことである — 上述の「**試み**」→「**模倣**」→「**反復**」→「**慣用**」 —。そして「これらのなすことがこれらのシンボルに関する何かを示す」と説かれるその「**こと**」とは「われわれが発見する」そのことにほかならず、すなわちかく説くことで「**新たなシンボル**」の「**絶対的なものそのもの**」・「**両者(外のものと内のもの)の絶対的統一**」であることが示される。ここでも次パラグラフへの繋がりはずスムーズである。

108h 一般に、通常の論理学で与えられる記述は同語反復の記述である *As a rule the description given in ordinary Logic is the description of a tautology*; しかし他の記述、例えば矛盾の記述も、まったく同様に示すことができる。 *but others might shew equally well, e.g., a contradiction.*

<大> A絶対的なものの開陳 一パラグラフ 第八文

それは一般に本質的相関の根拠をなしているものであるが、ただ本質的相関は相関としてまだこの自分の同一性へと還帰しておらず、相関の根拠がまだ定立されていないだけのことである。es ist dasjenige, was überhaupt den Grund des wesentlichen Verhältnisses ausmacht, das als Verhältnis nur noch nicht in diese seine Identität zurückgegangen und dessen Grund noch nicht gesetzt ist.

<資> 第一節資本の一般的定式 四パラグラフ

貨幣としての貨幣と資本としての貨幣とは、さしあたり、それらの流通形態の相違によってのみ区別される。Geld als Geld und Geld als Kapital unterscheiden sich zunächst nur durch ihre verschiedene Cirkulationsform.

『大論理学』に謂う「それ」は「絶対的なものそのもの」であり、「本質的相関」は「内のもの」と「外のもの」の相関である。そして「絶対的なものそのもの」が「本質的相関の根拠をなしている」のだから、「本質的相関」は「根拠づけられたもの」である。ただ「本質的相関は相関としてまだこの自分の同一性（絶対的なものそのもの）へと還帰していない」から・換言して相関する両者が没落した〔根拠へと到った〕zugrunde gegangen ということがないのだから、「根拠づけられたもの」は「根拠」から区別されており、つまり「相関の根拠がまだ定立されていない」のである。

『資本論』である。「貨幣としての貨幣」（外のもの）と「資本としての貨幣」（内のもの）とは「さしあたり区別される」。けれどもその「さしあたる区別」は「空虚なまたは外的な区別」であったから、両者は「それらの流通形態の相違 ihre verschiedene Cirkulationsform によってのみ区別される」・換言すれば両者の「相関の根拠はまだ定立されていない」。なお「貨幣としての貨幣」（W-G-W）は「同語反復」であり<sup>(15)</sup>、これに対して「資本としての貨幣」（G-W-G'）で両極は「矛盾」する<sup>(16)</sup>。

「ムーア」が「同語反復」に言及するのは、「新たなシンボル」が「外のもの」と「内のもの」との「絶対的統一」だからである。例に即して言えば、いま言語は「行けられる」の交通する「この言語」・すなわち「すべてのことを表現できる言語」であり、直近ではその言語の「固有性」(内のもの)の示し方が説かれた。けれども「内のもの」は「外のもの」と「絶対的統一」においてある。換言すれば、両者の「空虚なまたは外的な区別」・すなわち「形式の相違」においてあるのが「この言語」である。だから「この言語」の「固有性」・この言語のこの言語たることは同語反復「この言語はこの言語である」で表わされ、このとき主語と述語は「それらの形式の相違によってのみ区別される」。しかしそうした形式的な区別が「新たなシンボル」について明かすことは何もない<sup>(17)</sup>。また主語述語の区別が空虚であるのだからら、「この言語はこの言語でない」という「矛盾の記述も、まったく同様に示すことができる」のである。

(未完)

## 注

(1) 本稿で使用する諸テキストは以下である。

Wittgenstein, L., Notes dictated to G.E. Moore in Norway, in *Notebooks 1914-1916*, 2<sup>nd</sup> ed. 1984, Basil Blackwell, Oxford. (典雅博訳「ノルウェーで G.E.ムーアに対して口述されたノート」 『ウイトゲンシュタイン全集』1 所収 一九七五年 大修館書店)

Hegel, G.W.F., *Wissenschaft der Logik II*, 1986, Suhrkamp, Frankfurt am Main. (寺沢恒信訳『大論理学』2 一九八三年 以文社)

Marx, K., *Das Kapital*, 1991, Diez, Berlin. (資本論翻訳委員会訳『資本論』第一・二分冊 一九八二～三年 新日本出版社)

Saussure, F. de, *Cours de linguistique générale*, 1995, Payot & Rivages, Paris. (小林英夫訳『一般言語学講義』一九七二年 岩波書店)

(なお引用に際して、ヘーゲル、マルクス、ソシュールのテキストについては邦訳書の訳文を借用した。ウイトゲンシュタインからの引用は拙訳で

ある。)

- (2) すると関連して想起されるのは、「語りえぬことについては、沈黙しなければならない」等と邦訳される『論考』7であろう。原書では‘Wovon man nicht sprechen kann, darüber muß man schweigen.’と‘sagen’でなく‘sprechen’であるが、ここでも‘sprechen’できないこととは必ずしも深遠なことに限られないであろう。
- (3) 「類推にはじめて正しい位置をあたえ、それが音韻変化とともに諸言語の進化の一大要因であり、それらが一の組織状態から他のそれへと移るときの手順であることを教えたのは、少壮文法学派である。」(『講義』 p.227)
- (4) 本稿において『大論理学』からの引用は、訳者注を含めて、とくに断りのない限り以文社版第2巻からであり、その頁数のみを掲げる。
- (5) 本稿での『資本論』の読みは、拙著『言語哲学への新視角』の補論「『資本論』の論理を読む」で説いた内容を一部修正している。
- (6) 「開陳 *Auslegung*」についての寺沢注は次である。

「開示」(*Offenbarung*)と「開陳」(*Auslegung*)とは同じ意味に使われている。ただし *Offenbarung* には「啓示」という宗教的な意味があり、とくに「絶対的なもの」に関してこのことばを使うと、「絶対的なもの(絶対者)」が「神」と解されやすいから、「神の啓示」という宗教的な意味に理解されやすい。おそらくそう理解される可能性をさけたかったからであろうと思われるのであるが、ヘーゲルは「絶対的なもの」に関していう場合に、「開示」(*Offenbarung*)ではなくて「開陳」(*Auslegung*)ということばを使っている。(p.381 注5)

- (7) 「言語 *langue*」の「絶対的なもの」であることについて、『講義』は次のように説いている。

言語にむかって「選びたまえ」といったそばから、「この記号だ、ほかのはいかん」と付け加える。ただに個人が、よし望んでも、いったん選択がなされるや、これをどの点でなりと変えるわけにはいかぬのみか、大衆自身片言隻句の上になさえその絶対権を振うすべがない；大衆は、あるがままの言語にしばられているのだ。(p.102)

(8) 「示すが、何かを口に出さない」は『哲学探究』46 節に引かれた『テアイテトス』のソクラテスの言葉を想起させる。

さて、名は本来単一なものを指し示す **bezeichnen** とは、どんなことについて言うのか。 —

ソクラテスは(『テアイテトス』) 言っている:「というのは、もし思い違いでなければ、僕は或る人たちからこういうことを聞いたように思うのだ: われわれも、そしてわれわれ以外のものも、それから合成されている — 私に言わせれば — 原要素については、どんな説明もありえない; というのは、それ自体で自立的にある **an und für sich ist** すべてのものを、ひとはその名で指し示すことができるだけだから; それ以外の規定は不可能で、それがあるとも、あらぬとも言えないのだ……しかしそれ自体で自立的にあるものを、ひとは……それ以外のどんな規定も用いずにこれと呼ばなくてはならない。それで原要素については、何か説明的に語る **reden** ことは不可能だろう; というのは、このものにはたんなる呼び名以外何もないのだから; 実際その名だけがあるのだ。この原要素から合成されているもの **das, was aus diesen Urelementen sich zusammensetzt** は、しかし、それ自体が絡み合った形成物であるように、その規定もまたそうした絡み合いにおいて説明的に語られる; というのは、そうした語りの本質は諸々の名の絡み合いであるのだから。」

こうした原要素がラッセルの「個体」でもあり、また私の「対象」でもあったのだ(『論考』)。

「名」A が「単一なものを指し示す」のであるから、「A は、A でないものではなく、A である」、約めて「A は A である」。すると「原要素」A は「A である A」であるから「原要素 (A) から合成されているもの」である。そしてこれに準えて言えば、「単一なもの」と考えられていた「行ける」は実は「合成されているもの」であり、すなわち「行けられる」であるところの「行ける」なのである。

(9) 「物自体」についての寺沢注は次である。

ここ [「物自体とは揚棄された媒介によって現存する・本質的な直接的なものと

しての現実存在するものである。Das *Ding-an-sich* ist das Existierende als das durch die aufgehobene Vermittlung vorhandene, *wesentliche Unmittelbare*.」に「物自体」という概念のヘーゲルによる定義が述べられている。「物自体」というとカントの「物自体」を思いうかべやすいが、ここではこの連想はじゃまになる。ヘーゲルの定義のみにしたがって考える必要がある。すなわち、媒介が揚棄されていることと、「本質的な直接的なもの」であることが「物自体」に与えられた規定であるが、「本質的な直接的なもの」とは、換言すれば、「自己との単一な同一性」であることである。すなわち、「物自体」は自己へと関係するものである。(p.353 注6)

(10) 『資本論』は次を説く。

金の第一の機能は、商品世界にその価値表現の材料を提供すること、すなわち、諸商品価値を、質的に等しく量的に比較可能な同名の大きさとして表わすことにある。こうして金は、価値の一般的尺度として機能し、そしてもっぱらこの機能によってはじめて、独自の等価物商品である金がなによりもまず貨幣になる。(p.161)

けれども

価値尺度機能のためには、ただ表象されただけの貨幣が役立つとはいえ、価格はまったく実在的な貨幣材料に依存している。たとえば、一トンの鉄に含まれる価値、すなわち人間的労働の一定分量が、等しい量の労働を含む貨幣商品の表象された一定分量によって表現される。したがって、金、銀、銅のどれが価値尺度として使われるかに従って、同じ一トンの鉄の価値はまったく異なる価格表現を受け取るのであり、言い換えれば、金、銀、銅のまったく異なる量によって表象されるのである。(p.163)

すると「金価格」と並んで「銀価格」「銅価格」というものが生じる。つまり貨幣は、一方「価値尺度としてのその機能」において「全体」であり、他方「価格の度量基



準としてのその機能」において「諸部分」である。『資本論』は或る注で『経済学批判』の次の叙述を引いている。

金と銀とが法律上貨幣として、すなわち価値尺度として並存する場合には、両者を一つの同じ物質として取り扱おうとするむだな試みが、つねに行なわれてきた。同じ労働時間が相変わらず同じ比率の金と銀とに対象化されているに違いないと想定することは、事実上、銀と金とが同じ物質であり、かつ、価値の低いほうの金属である銀の一定量が一定の量の不変の一部分をなしていると想定することである。(邦訳『全集』13巻 p.58)

(11) 『資本論』から。

貨幣の通流は、同じ過程の不断の単調な反復を示す。商品はずねに売り手の側にあり、貨幣はずねに購買手段として買い手の側にある。貨幣は、商品の価格を実現することによって、購買手段として機能する。貨幣は、商品の価格を実現することによって、商品を売り手の手から買い手の手に移し、他方、同時に、自分は買い手の手から遠ざかって売り手の手に移り、別の商品についてまた同じ過程を繰り返す。貨幣の運動のこの一面的な形態が商品の二面的な形態運動〔形態上の変化〕から生じているということは、おおい隠されている。商品流通そのものの本性が、それと反対の外観を生み出す。商品の第一の変態は、貨幣の運動としてだけでなく、商品自身の運動としても目に見えるが、商品の第二の変態は、ただ貨幣の運動としてしか目には見えない。商品は、その流通の前半においては、貨幣と場所を換える。それと同時に、商品の使用形態は、流通から脱落して消費にはいる。商品の価値形態または貨幣仮面が商品に取って代わる。流通の後半を、商品は、もはやそれ自身の生まれながらの外皮ではなく、金の外皮に包まれて通り抜ける。それとともに、運動の連続性はまったく貨幣の側に帰することになり、商品にとっては二つの相対立する過程を含むその同じ運動が、貨幣自身の運動としては、つねに同じ過程を、すなわち貨幣がつねに別の商品と行なう場所変換を、含む。それゆえ、商品流通の結果である別の商品による商品の置き換えは、商品自身の形態変換によって媒介されるのではなく、流通手段としての貨幣の機能に

よって媒介されるものとして現われ、流通手段としての貨幣が、それ自体としては運動しない諸商品を流通させ、諸商品を、それらが非使用価値である人の手からそれらが使用価値である人の手へと — つねに貨幣自身の進行とは反対の方向に — 移すものとして現われる。貨幣は、たえず商品の流通場所で商品に取って代わり、それによって貨幣自身の出発点から遠ざかることにより、諸商品を絶えず流通部面から遠ざける。それゆえ、貨幣の運動は商品流通の表現にすぎないにもかかわらず、逆に、商品流通が貨幣の運動の結果にすぎないものとして現われるのである。(p.195)

かくして「貨幣の運動は商品流通の表現 *Ausdruck*」・「外面態 *Äußerlichkeit*」であり、すなわち「力の発現 *Äußerung der Kraft*」である。

(12) 「内のもは直接に外のものであるにすぎず、またそれが外面態という規定態であるのは、それが内のものであるがゆえにである。逆に外のもは、それが外のものであるにすぎないがゆえに、内のものであるにすぎない。」(『大論理学』 p.211)

(13) 「出来事を穴の中に押し込む [突っ込む] *put into*」は、『大論理学』「力とその発現との相関」「a 力が制約されてあること」の次の叙述を想起させる。

それだから、物または物質はどのようにして力をもつようになるかと問われるならば、力は外的に物と結びつけられ・疎遠な強制によって物に押し入れられている [刻印されている] というように現われるのである。Wenn daher gefragt wird, wie das Ding oder die Materie dazu komme, eine Kraft zu *haben*, so erscheint diese als äußerlich damit verbunden und dem Dinge durch eine fremde Gewalt *eingedrückt*. (p.202)

「可能」のニュアンスが「流用」という「疎遠な強制」によって「物」(行ける・行けられる)に「刻印される」。「穴の中に押し込められた」それらは「力と結びつく」・「力をもつようになる」。「直接的に存在である」という規定を本質的にもっている総体性としての本質」とはこれである。

なお「力」とは次のように説かれる。

力をよりくわしい規定において考察すれば、第一に力は存在的な直接態の契機をそれのもとにもっている；これに反して力そのものは否定的統一として規定されている。だが直接的存在という規定におけるこの統一は現実存在する或るものである。この或るものは、直接的なものとしての否定的統一であるから、最初のものとして現われるが、これに反して力は、反省したものであるから、定立された存在として現われ、またその限りで現実存在する物ないしは物質に属するものとして現われる。(同)

例に即して言えば、「存在的な直接態の契機」は「貨幣財産」・「土地財産」また「行ける」「行けられる」、「力そのもの」は「資本」また「可能」のニュアンスである。「だが直接的存在という規定におけるこの統一は現実存在する或るものである」から、「資本は、どこでも最初はまず貨幣の形態」なのである。また「力」が「現実存在する物ないしは物質に属するものとして現われる」ということにおいて「行ける」・「行けられる」は「力をもつようになる」のである。

(14) ここでは「一定の諸過程を経る」ことが「貨幣の資本への転化」の「規定された根拠 *bestimmter Grund*」をなしている。そして「根拠は自分の本質的な前提としての直接的なものへと関係しており」(『大論理学』p.134)、その「直接的なもの」・「制約 *Bedingung*」が「資本に転化すべき」という「当為」である(ただし当為が当為にとどまる限り、「直接的なもの」は「制約であることに対して無関心的である」(同 p.135)。「存在」と「本質」とが「当為」において「外的な区別」である所以である)。なおこの「一定の諸過程を経てみずからを資本に転化すべき貨幣」と同じ論理が廣松渉によって展開されていることは、「論理的構文論」の観点からは興味深い。廣松曰く、

福田赳夫伝の第二頁に出て来る赤ん坊を「これは福田だ」と認知するのは、老福田と類似の面影を看取するからではない。類似性を根拠にして福田と呼ぶのであれば、— 嬰兒福田と老人福田との面影上の類似度に比べて、はるかに — 類似の度合が強い人物は幾らでも居るのであるから、それらの人物をことごとく福田と呼ぶべきことになってしまおう。(『もの・こと・ことば』 p.152)

けれども廣松はその「赤ん坊を「これは福田だ」と認知する」。なぜか。

私の直接的な認知に即するかぎり、およそ類似していなくとも、世人が——一定の根拠をもって——赤ん坊の姿で写っている人物と老人の姿で写っている人物とを同一の「福田赳夫」と呼ぶことに追隨して、これらおよそ別物にしか思えないものを、私も同じ「福田」と呼ぶだけの話である。(同)

「一定の根拠」すなわち「規定された根拠」であり、それによっていわば「赤ん坊」が「福田」に転化する」のである。

(15)「W-G-W」の「この運動は、その素材の内容からすれば、W-W、すなわち商品と商品との交換であり、社会的労働の素材変換であり、その結果のなかでは過程そのものが消えうせている。」(『資本論』 p.180 傍点は川崎)

(16)「貨幣が蛹の状態を脱して資本に成長するさいの流通形態は、商品、価値、貨幣、および流通そのものの本性について以前に展開されたいっさいの法則に矛盾する。」(『資本論』 p.266)

(17)「もろもろの規定された根拠についての反省がここで明らかにされたような[形式的]根拠の形態にたよっている場合には、根拠を示すということは、定立されたものとみなされてはいるが直接的な定在の形態ですでに現存しているのと同じ内容を、自己内反省・内的存在の形式で表現する、たんなる形式主義と空虚な同語反復にとどまる。このゆえに、根拠を示すそのような仕方は、同一律にしたがって[AはAである、と]しゃべるのと同じ空しさをともなっている。」(『大論理学』 p.117)

(本稿は 2011 年度中期研究 [在ドイツ] の研究成果の一部である)